

名大医学部学友時報 2018 9

目次

1. 第 109 回学友大会開催にあたって	(1)	6. 支部だより 首都圏支部総会	(9)
2. 叙勲・紫綬褒章 貝淵 弘三	(2)	7. クラス会だより 豪一会	(10)
3. 特任教授就任 天野 学	(3)	8. 名古屋支部総会のお知らせ	(10)
4. 新院長に聞く 愛知県済生会リハビリテーション病院		9. 前期学生生活報告	(11)
岡崎市民病院 田内 宣生	(4)	10. クラブ活動報告 名古屋大学医学部硬式テニス部	(13)
名古屋第二赤十字病院 早川 文雄	(5)	11. 学友大会ご案内	(13)
名古屋第二赤十字病院 佐藤 公治	(6)	12. ミニ展示会『医学史に残る大先輩の足跡』	(14)
5. 第 30 回日本医学会総会 2019 中部 役員からのご挨拶	(7)	13. ご寄稿のお願い	(16)
		14. 編集後記	(16)

第 109 回 学友大会開催にあたって

このひろし
大会委員長 河野 弘



本年開催されます、第 109 回名古屋大学医学部学友大会の委員長を仰せつかりました一般社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院の河野 弘と申します。開催日時は、10 月 6 日（土）名古屋観光ホテルにて 14 時からです。顧問委員の大学院腫瘍外科学の棚野正人教授、深谷昌秀講師、学外からは松本隆利八千代病院名誉理事長、加藤岳人豊橋市民病院長、当院の北川喜己副院長、加藤祐一郎消化器外科部長、各学年代表委員の先生方と準備を進めています。

私は昭和 53 年の卒業ですが、医学も日進月歩で十年一昔となりました。私の専門とする消化器外科の領域では、拡大手術から機能温存へ、開腹手術から鏡視下手術、

さらにロボット支援手術と、侵襲の少ない手術へとシフトされました。医療情勢も、社会の変化とともに大きく変遷を遂げています。高齢化社会が進み、医療費の抑制などで医療は大きな過渡期にあります。市中病院では臨床研修制度、新専門医制度、地域医療連携構想などと、大学はもちろん病院間での水平、垂直の連携強化が求められるようになりました。来年は、第 30 回日本医学会総会 2019 中部が、この名古屋で、齋藤英彦名誉教授を会頭として開催されます。今後、名古屋大学を中心とした医療機関の結びつきがこれまで以上に重要となってきております。この学友会大会を通してその連携強化のお役に立てればと考えています。

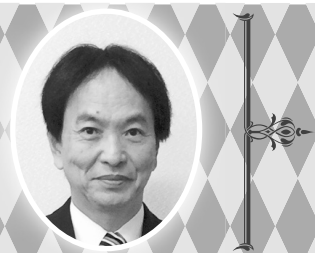
今回の特別講演は名古屋大学前総長で、現国立研究開発法人科学技術振興機構理事長の濱口道成先生に「科学技術で未来を描け」というタイトルでご講演を賜ることにしました。近年、地盤低下が危惧されている科学技術立国の日本が、今後どのように世界で発信していくべきか、という研究の方向性を示していただけるとと思います。楽しみに拝聴させていただくとともに、先生方にも有意義な講演になるものと期待しています。

最後に、多くの学友会員の先生方にご参加頂き、旧交を温めると共に、多くの世代間で交流が生まれ、名古屋大学医学部にとりまして意義深い大会になりますことを期待しています。会員の皆様方のご健勝とご活躍を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

紫綬褒章 受章インタビュー

かいぶち
貝淵こうぞう
弘三

先生（神経情報薬理学 教授）



——紫綬褒章の受章おめでとうございます。受章のご感想をお聞かせください。

今まで学会や財団の賞などは頂いたことがあったのですが、紫綬褒章というのは政府から頂くため、親戚や中高の友人など、大学の関係者ではない知人から沢山お祝いしてもらうことができ嬉しかったです。

——先生は数々のご功績をあげられていますが、この度は特にどのような点が評価されての受章だとお考えですか。

受章理由は、細胞生物学と生化学の分野に対する長年の貢献ということだそうです。具体的には Rho- キナーゼの発見がその一つとして挙げられます。私たちの体を構成している細胞内には骨格や接着装置が存在するのですが、それが外界シグナルによってどう制御されているかはほとんど分かっていませんでした。低分子量 G 蛋白質の Rho のターゲットの Rho- キナーゼを発見、その作用機構を明らかにすることによって細胞骨格、接着、細胞の収縮の制御機構が分かるようになりました。二つ目は、細胞の収縮と並行して平滑筋の収縮も Rho- キナーゼで制御されているという事発見です。これは狭心症、喘息、脳血管攣縮といった異常収縮にも関与しており、その制御機構をターゲットにした薬剤の開発にも関係するため臨床的にも非常に重要です。三つ目は、CRMP-2 が Rho- キナーゼの脳内基質であると明らかにしたことで、神経細胞における軸索と樹状突起の極性形成に Rho- キナーゼや CRMP2 が必要だと分かりました。

——先生の現在のご研究について教えてください。

今力を入れていて、一番評価されているのが、任意のリン酸化酵素の基質を明らかにする方法を開発したことです。これまで、リン酸化酵素に対する上流からのシグナルの多くは分かっていたのですが、リン酸化酵素の数百種類ある基質についてや、それがどう働いているのかは、Rho- キナーゼをふくめ殆ど分かっていませんでした。

今は開発した手法を用いて、脳の中で働いているドーパミンなどの神経伝達物質の作用機構を明らかにしようとしています。

研究者人生の中で今が一番面白く、重要な研究を行っていると思います。

——研究における今後の展望をお聞かせください。

ドーパミンなどのモノアミンは情動行動や精神疾患の病態に深く関与していますが、その作用機構はよく分かっていませんでした。脳の神経はグルタミン酸のような単一の刺激によって発火するのではなく、少なくとも二重に支配を受けています。私達は最近、ドーパミン刺激によって神経細胞内のシグナル系が動いて細胞膜の興奮性が上がり、グルタミン酸刺激への感受性が亢進して神経細胞が発火することを見出しました。その結果、報酬行動や快情動行動が現れます。その分子メカニズムを明らかにして情動行動が現れる仕組みや精神疾患の病態を理解しようとしています。

——最後に、学生へのメッセージをお願いします。

最近の学生は愛知県内に留まることが多いようなので、愛知県から外に出て特に海外にいてほしいと思います。今まで沢山の学生を見てきましたが、ほとんど例外なく留学は楽しかったと言っています。私自身も、留学し色々な土地を渡り歩いたことは、自分の糧になっています。学部留学だけでもいいのですが、お客さんとして海外に行くのではなく、2～3年海外で暮らし、働けるともっといいと思います。本の上で勉強するだけではなく、旅をして世界中の色々な人と話して視野を広げてください。そういった経験を通して、ぜひ世界に向けて情報発信できるようになって欲しいです。

（インタビュアー：小西 なつの、栗田 祥太郎）

特任教授就任

先端医療・臨床研究支援センター 特任教授

あまの まなぶ
天野 学

〈経歴〉

- 1984 年 3 月 名城大学大学院 薬学研究科修士課程 修了
1984 年 4 月 ブリストル・マイヤーズ研究所株式会社 (現ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社) 入社
1990 年 7 月 名古屋大学大学院医学研究科医療薬学 医学部附属病院研究生
1994 年 5 月 名古屋大学医学部にて博士 (医学) 取得
1997 年 4 月 日本薬理学会学術評議員
2018 年 7 月 名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター 特任教授

〈業績〉

1. Amano Manabu, Goto Arata, Takahashi Norimitsu, Hasegawa Takaaki, Nabeshima Toshitaka. Effect of BMY-21502 on anoxia in mice. Jpn J Pharmacol. 1993;61:157-163.
2. Amano Manabu, Goto Arata, Sakai Atsuko, Achiha Minako nee Hara, Takahashi Norimitsu, Hara Chiaki, Ogawa Nobuya. Comparison of the anticonflict effect of buspirone and its major metabolite 1-(2-pyrimidinyl)-piperazine (1-PP) in rats. Jpn J Pharmacol. 1993;61:311-317.
3. Amano Manabu, Hasegawa Masaya, Hasegawa Takaaki, Nabeshima Toshitaka. Characteristics of transient cerebral ischemia-induced deficits on various learning and memory tasks in male Mongolian gerbils. Jpn J Pharmacol. 1993;63:469-477.
4. 天野 学、石川博樹、C 型慢性肝炎経口治療薬ダクラタスビル塩酸塩 (ダクルインザ®) およびアスナプレビル (スナベプラ®) の薬理学的特性と臨床効果、日薬理誌、2015;145:152-162.
5. 天野 学、小林洋子、長谷川真裕美、大塚康司、抗悪性腫瘍薬 ヒト型抗ヒト CTLA-4 モノクローナル抗体イピリムマブ (ヤーボイ® 点滴静注液 50 mg) の薬理学的特性と臨床効果、日薬理誌、2016;147:243-252.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

2018 年 7 月 1 日付けで、名古屋大学医学部附属病院の先端医療・臨床研究支援センター特任教授を拝命しました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、大学時代に中枢薬理を専攻しておりました。当時、鍋島俊隆先生 (前名古屋大学医学部附属病院薬剤部長) のご指導の下、乱用により統合失調症に類似した症状を呈する麻酔薬の phencyclidine (PCP) を統合失調症のモデル薬物と捉え、動物での行動変化と脳内の生化学的变化を中心に研究してきました。これらの結果から統合失調症の神経学的な変化や、併せて脳内各種神経系の相互作用の一端を知ることができました。仮説を立て、それをどのような実験系で検証するのが良いかを考え、一つ一つ積み重ねていく研究は、地道ですが思い通りの結果が出た時の喜びは今も忘れません。

1984 年、当時製薬会社のブリストル・マイヤーズ (現ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社) では、新規作用機序を有する抗不安薬の開発が進められており、これまでの知識と経験を生かせるのではとの思いから入社させていただきました。当時は、国内での新薬承認申

請に必要な一般薬理試験のデータを広範に収集することが主な業務でした。ガイドラインに準じ、中枢・末梢神経系、呼吸循環器系、消化器系等に及ぼす影響を *in vitro*、*in vivo* で評価することにより、多くの実験手技を身に付けることができました。

1990 年、社内で脳循環改善薬を開発する計画が持ち上がりましたが、申請にはいくつかの薬効薬理試験の追加が必要でした。そこで、会社は本領域で著名な研究者の一人であった鍋島俊隆先生にその実施を依頼しました。先生は名古屋大学に移動されて間もなく、企業の協力があればという条件付きでご承諾され、結果、私が出向して試験をすることとなりました。実験は順調に進んでいたのですが、残念ながら会社方針により道半ばで開発中止となってしまいました。しかし、幸運にも会社のご理解があり、その後も研究生として継続させていただくことができました。1994 年、スナネズミという脳の Willis 環形成が不完全な動物を用いて簡便な脳虚血モデルを作成し、その学習・記憶障害の特徴をまとめた論文で、名古屋大学より博士の学位をいただくことができました。

今般、縁があり 24 年ぶりに名古屋大学医学部附属病院に戻り、先端医療・臨床研究支援センターのメンバーとして着任させていただきました。当センターではさまざまな専門性の高い方々が活躍されています。その一人として採用していただいたことに感謝申し上げますと共に、大きな責任を感じています。ブリストルでの 34 年間に、抗腫瘍薬のタキソール、シスプラチン、カルボプラチン、セツキシマブ、ダサチニブ、イピリムマブ、抗ウイルス薬のジダノシン、サニルブジン、アタザナビル、エンテカビル、ダクラタスビル、アスナプレビル、ベクラブビル、関節リウマチ治療薬のアバタセプト、糖尿病治療薬のダパグリフロジン、循環器用剤のソタロール、アピキサパン、イルベサルタンの 18 種類の新薬申請を非臨床の立場でサポートしてきました。今後、先端医療・臨床研究支援センターでの業務を進めていくにあたり、これまで培ってきた薬理学的視点でのサポートや新薬申請の知識・経験を活かして、革新的医療を重い病で苦しむ患者様に少しでも早く届けられるような手助けをしていきたいと思っています。学友会の皆様におかれましては、ご指導とご鞭撻をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。